

＜前回＞無教会キリスト教の系譜から

(1) 塚本虎二と無教会のダイナミズム

1. 近代以降のキリスト教の一つの可能性。集会と雑誌、あるいはゼクテと神秘主義は、内的緊張をはらむ両極構造 → 無教会の多様性
3. 内村と塚本虎二との対論。両者における無教会主義理解の相違。
5. 無教会と教会を峻別し教会を端的に否定する塚本の無教会主義理解と、内村の無教会論との微妙の差異、いわば温度差。
 - 内村の弟子たちはそれぞれの仕方内村自身の中に共存している可能性の内、一定の範囲のものを受け継ぎ発展させた。
 - 無教会キリスト教の多様性。塚本虎二はきわめて重要な位置を占めている。
- 塚本の系譜。無教会派聖書学者／無教会霊性派
6. 無教会派聖書学者。関根正雄、中沢洽樹、前田護郎のいずれもが、塚本虎二と密接な関わりを有している。
7. 雑誌と集会の二つの活動形態のいずれにおいても、聖書研究が中心。聖書研究こそが無教会の核心。
 - 聖書研究：信仰的建徳的な聖書読解／近代的学問の性格を有する「研究」
 - 塚本こそが内村の聖書研究の学的側面の継承者であった、その成果が塚本訳新約聖書。
8. 聖書学への展開と近代以降の神秘主義類型の動向と合致すること。
9. 無教会は、日本においても形成されつつあった教養市民層の知的欲求に応じる側面を有していた。無教会の集会が教派教会以上に学校的性格を特徴としていた、無教会キリスト教には、近代以降の状況における神秘主義の展開に合致した教養宗教としての性格を確認ができる。
10. しかし、聖書学への展開は、無教会キリスト教において問題を生じないか？
 - 神秘主義類型の特徴とも言える個人主義的傾向は、聖書の読解における個人的な解釈につながることによって、集会としての無教会キリスト教の秩序との間で緊張を生み出す。
11. 聖書学や個人の聖書読解のもたらす解釈の幅に一定の制約を課そうとするならば、それは、関根正雄が指摘する「共通の言語すなわちロゴス」(関根、1948、15)としての「神学」とは別の意味での神学(いわば「教派的」な神学)を必要とする。
 - 「紙上の教会」(読者のネットワーク)という点では、個人主義的傾向は大きな問題を生じないとも言えるが、集会としての無教会にとっては問題なしとは言えない。
12. 「無教会派霊性運動」と呼びうる動き(赤江、2013、262)。
 - その中核となるのは、手島郁郎の「キリストの幕屋」運動(宗教法人名は「キリスト聖書塾」。「キリストの幕屋」「原始福音運動」など)。
 - 手島は塚本虎二に傾倒する無教会派の信徒であったが、神の臨在を体験し伝道活動を開始した。
13. 手島のキリスト教理解には、「聖霊のバプテスマ、癒し、異言などペンテコステ派の特徴」が顕著であり、このペンテコステ派の特徴が広まる中で、手島は「無教会運動の全面的な決別」に至ることになった(マリンズ、2005、160)。しかしその伝道雑誌『生命の光』には、当初塚本をはじめ無教会キリスト教関係者が手紙や論考を寄稿している。
14. 「手島の有力な協力者となったのが、先に見た関根正雄であり、東大のドイツ語教師・小池辰雄であった。彼らはいずれも塚本集会の主要メンバーであった。」(赤江、2013、264)
16. 聖書研究：無教会派聖書学と無教会派霊性運動との重なり。そして、両者はここから分かれて行く。手島的な霊性運動へ至る契機が内村自身にも潜在していた。

17. 内村は再臨運動との関わりを含めてしばしば指摘されるように、ペンテコステ派的な靈性運動には批判的である（岩野、2013、164-169）。

しかし、内村が信仰などを論じる際のポイントとなる「実験」は、直接的な体験という点での神秘主義的な側面と無関係ではなく、靈性運動とも重なりうる契機を内包していたと言えないであろうか。

18. 実験や経験という契機の強調は宗教改革に遡及する近代キリスト教の特徴の一つ。それは聖書主義を生み出すと同時に、靈的体験の強調とも結びつくことができた。

宗教改革が内包していた諸動向が後に相互対立を伴いながら顕在化したのと同じ事態を、内村以降の無教会キリスト教の展開においても確認できる。

内村→塚本→聖書学的聖書研究と靈性運動。

19. ティリッヒ。宗教改革以降の思想の諸動向の展開について、「敬虔主義と合理主義との共通点は、神秘主義的要素である」、「ギリシア文化でも近代文化でも、合理主義は神秘主義の娘である」（ティリッヒ、1980、33）。

（2）矢内原忠雄と日本的キリスト教

・1893-1961 ・無教会主義キリスト教、内村鑑三の弟子、経済学者。

15. 『国家の理想——戦時評論集——』所収の諸論考。

「日本的基督教といふのは、西洋かぶれのしない基督教といふこと」であり、思想的経済的に西欧キリスト教会から自立した日本人による日本伝道を行う教会、つまり、矢内原の師である内村鑑三の目指したキリスト教に他ならない（矢内原、一九八二、一一六）。

16. 日本的キリスト教は、「日本人の心によつて基督教を把握するといふ事」である（同書、四三七）。

→ キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能である。

17. 大切なのは、「之を私共が欧米人を通して習うのでなしに、日本人の心を以て直接神様から」習うこと。

19. 真の愛国は、旧約聖書の預言者イザヤの場合のように、正義と平和という国家の理想に基づいて現実の国家の誤りを批判しつつ表明されるものであって、「愛と平和と正義の上に立つ民族主義」（同書、三二五）。

20. 矢内原を東京帝国大学教授辞任に追い込むことになる「一先ず此の国を葬つて下さい」という言葉。「真の愛国」という地点から発せられた。⁽¹¹⁾

21. 大拙の理解する鎌倉仏教が仏教自体の新しい可能性の開花であったのと同様に、日本的キリスト教は、キリスト教自体の新展開である。

「それは日本精神の美を発揮し、英米人も独逸人も他の如何なる民族も為し能はざる処の新しい貢献をば、基督教真理の研究と開展に附け加ふる積極的なものでなければならぬ」、「其の意味に於てのみ日本的基督教の運動は、基督教歴史の一大時期を劃するものであり得る」（同書、一二〇）。

22. 日本的キリスト教は、キリスト教の新しい可能性を切り開くものであるとともに、日本が世界に貢献することを可能にする。

「日本的基督教の使命は、第一には、日本人の心によつて基督教の深い真理を、深い深い基督教の真理を新に把握する、新なる角度から把握する、之が第一であります。第二には、斯くして把握したる基督教によつて日本の国を高める事である。さうして日本の国によつて世界を高める事であります。」（同書、四三八）

（3）南原繁と政治哲学の源泉

8. キリスト教社会主義と社会批判

(1) 問題——近代の政治思想としての社会主義、キリスト教、近代日本

1. 近代という時代の政治状況：国民国家の形成とグローバル化の進展、啓蒙主義

啓蒙主義の自由と平等を普遍的理念 →

アナキズムや自由主義から社会主義、そして共同体主義に至る、近現代の主要な政治思想が共有する問題圏。

2. 社会主義：近代の歴史状況を端的に反映した政治思想。

一方で、個人主義的自由主義を批判するという点で、様々な共同体主義と結びつくものとなると同時に、他方では、自由主義の徹底化という点で、アナキズムやリベタリアニズムとも合致。

3. 19世紀から20世紀にかけてのキリスト教社会主義や宗教社会主義の一連の試み。

→ 近代以降のキリスト教政治思想と社会主義の関係

(2) キリスト教社会主義とその限界

4. 社会主義：近代——欧米諸国による国民国家モデルと世界覇権の形成——以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群。

近代の自由主義的資本主義的社会秩序の進展によって発生した諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境など）を社会変革（改良から革命まで）や社会的共同性・相互性によって克服することを志向し、人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等への拡張を含む平等主義）を内容とする道徳的正義と幸福の理念との実現をめざす。

5. 現実の問題への実践的取り組みを理論化：イギリスのキリスト教社会主義運動の歴史的文脈。

イギリスにおける団結禁止法（1800年）への反撃は、まず、1802年の工場法（若年徒弟の労働時間を12時間に制限）となって現れ、1824年の団結禁止法撤廃を経て、八時間労働制の確立——1917年にロシア革命後のソ連で導入され、1919年のILO第1号条約として確立する——に至る。これは、社会主義の進展と一つの歴史的プロセスを形成していた。

6. キリスト教社会主義：英国国教会に所属する思想家たち（F.D.モーリス、C.キングスレーら）に指導された社会改良運動。共産主義的な社会主義とは異なり、信仰に基づき、隣人愛と神の前の平等というキリスト教的理念の社会的実現を目指す。

職能別組合や消費組合などの各種の相互扶助の組合運動、そして労働者教育（隣保館・セツルメント事業、労働者大学）を推進。

↓

キリスト教信仰に基づいた社会正義への理論的また実践的な取り組み

イギリスを超えて同時代のアメリカやスイス、ドイツ、そして日本へ。

第二次世界大戦後のフランスの労働司祭運動や解放の神学。

7. アメリカの「社会的キリスト教」

1880年代、アメリカの神学校を中心に生じた神学運動（片山潜(1859-1933)が留学したアンドーヴァー神学校はこれに含まれる）。

南北戦争後、19世紀後半のアメリカ：資本主義経済の発展にもかかわらず、貧困問題と労働問題という深刻な社会問題。社会的キリスト教は、こうした社会状況に対して無関心なキリスト教への批判・反省を求め、19世紀の近代聖書学の展開によって崩れ去った聖書の無謬説に代わる、新しい神学建設の要請に応えることをめざす。

8. 社会的キリスト教の思想的特徴（隅谷、1977、21-22）。
 - (1) 神の内在性の強調。進化プロセスにおける神の内在性を認め、宗教の目標は世俗世界（地上）における良き生活（神の国）の実現に置かれる。
 - (2) 罪人としての人間観の否定。人間の不完全さや欠陥は、理性によって改善可能であり、その原因は社会的矛盾にある。
 - (3) 隣人に対する自由な奉仕の象徴としてのキリストの十字架の強調。キリストの贖罪思想は後退し、キリストの愛へ強調点が移る。
9. アメリカの教派を超えて進展していた「社会的福音」(social Gospel)の主張と一致。
10. 明治期の日本キリスト教と近代日本の政治・社会的状況。

自由民権運動（おおよそ 1870-80 年）への積極的な関与、キリスト教的な戦争論の展開（内村鑑三の非戦論など）、足尾鋳毒事件への取り組み、そして、労働運動・社会運動への先駆的で指導的な関わり。→日本のキリスト教社会主義
11. 「日本の社会主義はキリスト教を一母胎として生まれ、活動してきた。しかしキリスト教界の大勢は社会主義に消極的であり、日露戦争では見解が全く対立した。社会主義者はキリスト教が次第に自分たちと敵対する支配層の側に立ち、それに奉仕する宗教であると断定するようになった。これに応じてキリスト教社会主義といわれる人たちの中に自己分裂が生まれてきたのである。」（土肥、1980、218）

（3）植村正久の論じるキリスト教的社会批判

12. キリスト教は近代西欧の形成過程に積極的に関与しただけでなく、西欧以外の諸地域における近代化にも様々な仕方で貢献してきた。これは、東アジア、とくに日本においても同様。

「何となれば、日本キリスト教徒の多数は、当初より社会問題に熱心なりしものなり。日本の開明発達とキリスト教の関係は彼らの一日も忘れざりし疑題なり。キリスト教徒が親子の関係、家庭の改良、雑婚蓄妾等の問題に付き、いかに熱衷せしか、またいかに熱衷しつつあるかを思え。女子教育の先駆者は誰なりしか」、「彼らは決して靈魂の事をのみ考え居たるものにあらず」（「キリスト教徒と社会問題」、363）、「わが国の清韓に事あるや」、「精神の上より、この戦争の意義を解釈し、大いに国家の前程に向かって寄与するところあらんを試みしものも、キリスト教徒にあらずや」、「当初より天下公共の事業に熱心にてありき。」（同、364）
13. 植村は、社会問題への関与の意義を認めつつも、それがキリスト教の中心的な活動であるかのように主張する立場には批判的である。欧米のキリスト教と比較するとき、「日本のキリスト教徒は人数未だ多からず、実力未だ充盈せず」（同、368）というのが実情である。「貧民問題のごとき、娼婦問題のごとき、海外教育のごとき、病院のごとき、神学以外専門教育のごとき、皆善良なる社会的事業なり。しかれどもその日本キリスト教徒現今の社会的事業なるべきや否やにつきては、われらすこぶるこれを疑わざるを得ず。」（同、373）
14. 明治日本のキリスト教は未だ力不足であり、「他日のために準備」（同、369）をなすべき段階にあるのであって、この段階でなすべきことは、言論による社会への関与なのである。「ゆえにわが国のキリスト教徒、その社会的事業多くは言論をもって準備するの時代なるに失望することなく、前途の希望に励まされて、その目下の職責を尽くさざるべからず」、「たとい実務的に社会の事業に与らざるも、これら言論思想に従事するものは、最も適切なる意味において天下を経営し、社会を救済するものにあらずや。」（同、369）

(4) カルスト宣教師と日本の社会主義思想

15. 明治日本の状況下、キリスト教信仰と社会主義思想との両方を保持し続けることは困難。片山潜、石川三四郎、安部磯雄、木下尚江らの中で、キリスト教信仰を保持し続けたのが、安部磯雄だけ。近代日本の社会主義に対する宣教師の寄与。

16. チャールズ・E・ガルスト(Charles Ekias Garst, 1853-1898)、ディサイプル派(Disciples)の最初の宣教師として来日(1883)、日本の農村の貧困問題から社会問題全般に取り組んだ。

1884年から秋田で伝道を開始。東北農村は厳しい困窮の中にあった。

1872(ウエスト・ポイント陸軍士官学校入学)、1876(同卒業)、1881(結婚)、
1883(日本伝道のためG.T.スミス夫妻ともに横浜着)、1884(秋田赴任、伝道開始)
1887(鶴岡に移る)、1891(アメリカ帰国)、1893(来日)、1894(東北伝道旅行、
健康を害し南京で静養)、1895(日本に帰り、築地に住む)、1897(社会問題研究会
発足・評議員、足尾鉍毒事件について講演)、1898(静岡、秋田伝道旅行、社会主
義研究会発足、地租増徴論に関心を寄せ帝国議会傍聴、永眠)

17. 「明治の土地問題の端緒は、六年の地租改正にあった。わが国資本主義の本源的蓄積に決定的役割を果たしたこの土地改革は、幾多の問題をはらんでいた。第一に、地価の百分の三と定められた税率が高率なことは、政府自身が改正条例の中に認める所であり、徳川時代の旧法による場合とほぼ等しいものであった。」(工藤、1996、33)

・封建的年貢に等しい税率は重い負担(+現物納から金納への変化)→不況による自作農の没落→小作農は政府の地主優遇政策から取り残され、全国各地で農民による暴動が頻発。

・明治期に進展する日本の資本主義経済：農村からの収奪による資本の蓄積に大きく依存していた。

・明治新政府の地租改正

地価の百分の三と決定された税率は封建的貢租に等しい重い負担を農民に課した。米価高騰は地主と自作農にしか恩恵とならない。不況による自作農の没落
→ 農民の収奪による資本の蓄積

東北農村の困窮

地租軽減論は小作人を利するところなく、地主の利益になるのみ。

それに対する地租増徴論(地主への増税による産業資本家の負担軽減)

18. ガルストの伝道方針：「かれら農民に福音を聞かせるためには、かれらの貧困の問題をともに考え、その解決に努力することが必要」(同、114)との認識に基づいた、「すべての神の子たちを、神の食卓につける計画」(同、42)。

↓

地租増徴論(地主への増税による産業資本家の負担軽減)を主張(地租軽減論は小作人を利するところなく、地主の利益になるのみ)

ヘンリー・ジョージ(H.George)の土地単税論：

南北戦争後の恐慌による社会問題の発生の根源には土地の独占がある。土地制度の改革と土地単税論を主張(地主の不労所得である地代をすべて社会に没収し、これを国家の唯一の財政収入としようという土地社会主義)。

「地主の不労所得である地代をすべて社会に没収し、これを国家の唯一の財政収入としようという土地社会主義」(同、50)。

19. 「天は主のもの、地は人への賜物」(詩編115編16節)との聖書の言葉に基づいて、神によって与えられた土地に対する万人平等の権利を主張し、地主による土地独占を批判

する。

「ガルストの単税論における根本原理は、人が生まれながらにして与えられた自由をば、それを阻碍するいっさいのものを排除して獲得しようとする」(同、90)との「自然法思想」 + 土地使用の自由と平等における神の義の実現という信仰的確信

20. 社会問題研究会や社会主義研究会の発足に立ち会い、足尾鉍毒事件について講演を行うなど、明治日本の社会運動に実践的に関与。地租増徴案の帝国議会通過を見届けた後、1898年に永眠。

21. ガルストの土地単税論(キリスト教信仰と社会主義的経済理論との結合)

広義に解したキリスト教社会主義(社会的キリスト教、社会的福音、狭義のキリスト教社会主義を包括するキリスト教的な社会思想)の典型的議論。

22. キリスト教社会主義の限界。

・「ガルストは地主への反感から増徴論を積極的に支持した。その結果、三一年一二月の地租増徴案の可決となったが、増徴された地租が小作料として小作人に転嫁され、小作人の困窮をますます増大する危険を彼は見通すことができなかつた。しかもその半面、地租増徴によって、これを財源とする産業資本家の育成が押し進められ、土地私有とは別個の独占が生ずることもまた彼は見抜きえなかつた。ここに彼の単税論の社会改革思想としての限界が指摘される」(同、93-94)、「ガルストの単税論及びその運動は、一個の思想的啓蒙運動に終わった」(同、62)。

地主への反発から増徴論を支持(単税論の限界)

結果的に小作人の負担が増える、産業資本の独占の強化

23. 最大の問題:キリスト教社会主義の理想主義が有した、社会的進歩への楽観的見方(楽観的な人間理解と歴史理解)、過度の心情主義。

R. ニーバーが、「愚かな光の子」として指摘した問題。

「われわれにとって今日特に関心を唆られるのは、第一次世界大戦後のティリッヒやニーバーによって提唱されつつあるキリスト教社会主義であつて、そこには従来の所謂キリスト教社会主義の福音信仰を逸脱する『社会的福音』の立場と呼ばれる安易な楽天的な内在主義に対する厳しい批判的態度が見られる。そしてそれがバルト神学の超越主義と既往の自由主義的なアングロ・サクソン神学とに対決するという意味をもっている点で注目される。」(武藤、1955、27)

24. キリスト教社会主義が19世紀の楽観的進歩主義的な人間理解の枠内に留まるものであつた。人間の深刻な罪について適切な洞察を持ち得なかつた、20世紀の二つの世界大戦という現実に対して十分な対決をなし得なかつたこと。

25. 20世紀の現代神学における現実主義の潮流。しかし、19世紀の自由主義神学あるいはキリスト教社会主義への全面的否定論は、極論か。

26. 「現実」(the real)とは何か。

ティリッヒ:歴史的現実を構成する力であるが、この力をどのように捉えるかに従つて、素朴現実主義、理想主義、現実埋没的現実主義、信仰的現実主義の四つの類型を提示。

理想主義から現実主義へ。しかし、いかなる現実主義か?

27. Idealismusは、観念論であると同時に理想主義であつた。

理想を失つた現実主義?

<補足>

ヘンリー・ジョージと社会主義との関わりについては、やや微妙な問題点が存在する。

ヘンリー・ジョージは、リカードの差益地代論（地代の増加は社会の進歩によるものであり、地代は社会に帰属する）に依拠しつつ、単税（the Single Tax Principle）論を主張したが、彼によれば、この単税論は、個人の労働によって増大する資本を社会帰属を説く社会主義とは異なるものとされ、ヘンリー・ジョージ、そしてガルストも自らは社会主義者ではないと主張している。つまり、社会主義の概念規定にもよるが、両者の意識にしたがえば、二人とも狭い意味の社会主義者ではないと言わねばならない。しかし、ヘンリー・ジョージの単税論は、イギリス労働党の創設に関わった社会主義者ケア・ハーディに影響を与え、またガルストが日本の勃興期の社会主義運動に直接関与したことなどを考えれば、ガルストを広義のキリスト教社会主義に含めることは十分に可能と思われる。広義のキリスト教社会主義とは、モーリス、ハーディ、ヘンリー・ジョージ、そして片山潜といった人物が織りなすネットワークとして理解できるであろう。

<参考文献>

1. Peter Scott and William T.Cavanaugh (eds.), *The Blackwell Companion to Political Theology* (2nd edition), Wiley-Blackwell, 2008.
2. 芦名定道「近代／ポスト近代とキリスト教—グローバル化と多元化—」、『キリスト教と近代化の諸相』（「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会）研究報告論集・創刊号、2008年、3-18頁。
3. "Sozialismus," in: Joachim Ritter und Karlfried Gründer (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.10*, Schwabe & Co, 1998, S.1166-1210.
4. 武藤一雄『宗教哲学』日本YMCA同盟出版部、一九五五年。
5. 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
6. 隅谷三喜男『片山潜』東京大学出版会、1977年。
7. 工藤英一『単税太郎C・E・ガルスト——明治期社会運動の先駆者』
聖学院大学出版会、1996年。
8. L.D.ガルスト『チャールズ・E・ガルスト（小貫山信夫訳）
——ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生』聖学院大学出版会、2003年。